2023 年10月29 日 久宝教会 降誕前節第9主日礼拝メッセージ

「私たちはここにいる」 牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 1章 1－14 節

穏やかな秋の気候が続いていますが、日本から遥か離れた中東の地では、イスラエル軍とパレスチナの過激派組織ハマスとの戦闘が続いており、死者の数は双方合わせて 8700 人以上となったと報じられています。パレスチナ自治区のガザ地区では、家屋の45%が破壊され、人口約220万人の過半数は行き場を失い、避難生活を送っているとのことです。さらに電気の供給は途絶え、食料や医薬品の不足も深刻で、国際的な支援物資も行き届かない状況が続いているそうです。一時停戦を求める国際世論も高まっていますが、そのような中でも刻一刻と被害は増え続けています。

絶望しか見えないような中で、「神様は一体何をしているのか。本当に神様がいるなら、何故こんなひどい状況を認め、放っておくのか。一刻も早く何とかして下さい……」そのような声も聞こえてきますし、世界の各地で懸命なお祈りもずっと捧げられて来ていることと思います。もちろん、私たちも一刻も早く戦禍が止むように、被害者や避難者に救援の手が届きますようにとお祈りし続けていますが、まだそのお祈りは聞き入れられてはいないようです。

「こんな地獄が存在することを許している神とは、一体何を考えているのか。そんな神は神ではない。むしろ本当は神などいないのではないか……」。そのような声も聞こえて来そうです。確かに『ヘブライ語聖書』の中には、軍事力の面では圧倒的に劣勢だったにもかかわらず、神様の助けによって戦いに勝利したりする物語がいくつも記されています。特に古代イスラエル民族のアイデンティティーでもある「出エジプト」の物語では、エジプトの地から脱出した無力なイスラエルの人々に後ろに、強大なエジプトの軍隊が追い迫りましたが、神がその両者の間に雲の柱を置いてイスラエルの人々を守り、行く手を阻む海を分けて道を開き、一方でそれを追ったエジプトの軍はみな、海に飲み込まれてしまったと伝えられています（出エジプト記 14 章）。紀元前何千年も前から語り継がれているこの神話を、そこに書かれている字義通りに受け取り、信じようとしている人たちにとっては、21

世紀の現代においても「人智を超えた天変地異などをもって、敵を滅ぼして、一刻も早くこの戦争を終わらせて下さい」という祈りになるのでしょうが、そのような形では戦争は決して終わらないということを、私たちは歴史の事実から学んで来ています。では、この現実の中で、神は一体どこにいて、どのように働かれるというのでしょうか。

今回の聖書の箇所も、神様とはどのような存在なのかについて書かれているものでした。「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった」（1：1）という印象的な詩文で始まる「ヨハネによる福音書」の冒頭です。このような書き方は『ヘブライ語聖書』の冒頭にある「創世記」の「天地創造」の場面を連想させます。神が「光あれ」と言われたので光が生じ、「地は草木を生えさせよ」と言われたので草木が生じ、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われたので、生き物たちがたくさん生まれて来たという天地創造の物語です。ですが、「ヨハネによる福音書」の冒頭が伝えているのは、「神様は言葉を用いて世界を創られました」ということではなく、「言(ことば)、それ自体が神であった」ということです。これは一体どういうことなのでしょうか。

古代日本語である大和言葉の「かみ（神）」は、「その姿は隠れていて目に見えない」という「隠り身」から来ているのではないかという説がありますが（大槻文彦『大言海』）、「ヨハネによる福音書」を記した人々も同じように 1 章 18 節で「いまだかつて、神を見た者はいない」と言い、その上で「父の懐にいる独り子である神イエス・キリスト、この方が神を示されたのである」と記しました。この世界を創られた神様、目に見えない神様とは、一体どんな存在なのか。それを人々は古代からずっと考え続けて来ていました。今回の「招きの詞」である詩編 104 編では「主よ、あなたの業はいかに豊かなことか。／あなたは知恵によってすべてを造られた。／地はあなたの造られたもので満ちている」として、世界の全てを創られた命の神は「知恵なる神」のイメージで謳われています。神はその時々に応じて、「命の神」「知恵なる神」「戦いの神」「裁き手の神」など、様々なイメージで描かれますが、「ヨハネによる福音書」の冒頭では「言である神」として描かれていま

す。そしてそれは言い換えれば「闇の中に輝く光の神」（1：5）であり、また「肉体をもって、私たちの間に宿られた神」（1：14）でもありました。つまり、今から約2000 年前にこの地上にお生まれになったイエス・キリストこそが、目に見えない神の姿、イメージを的確に表わしている方、示している方であり、私たちはそのイエス・キリストの姿を通してのみ、神の姿を知ることができるというわけです（ヨハネ14：9）。

「世界を創られた命の神、神の子イエス・キリスト、聖霊」の三位一体である神を、言い換えて「見えない神、見える神、感じる神」という表現があります。「見えない神」は当然触れることも出来ない存在であって、語ったり表現したりすることも出来ないような存在です。一方でイエス・キリストは生身の肉体を持った人間として2000 年前のクリスマスに生まれましたので、当然その姿を見ることも触ることも、会話することも、一緒に食事をすることも出来た方でした。「言（ことば）である神」とは、そのように私たちがコミュニケーションを取ることが出来て、認識して表現することが出来る存在だということなのだと思います。

さて、ではそのようなイエス様が、その身をもって示された神様とは、どのような方だったでしょうか。天変地異など人間の力を越えた強大な力で敵を一網打尽にやっつけるような神様だったでしょうか。この地上から闇という闇を一瞬で取り去ってしまうような神様だったでしょうか。いいえ、そうではなく、「闇の中に輝く光」としての神様でした。神様の姿が見えなくなって、不安に思い、孤独に感じた時でも、それでも「私はあなたと一緒にいる」と言ってくださる「インマヌエルの神」、「私たちと常に共にいてくださる神様」、それがイエス・キリストがその言動、振る舞いを通して示してくれた神の姿でした。

戦争や大災害、病気や貧困など、「この世は地獄。一寸先は闇」としか思えないような時も、私たちの人生の中では、確かにあるのだと思います。「神も仏もいないじゃないか」としか思えない状況の中では、「もしも神がいるなら、早く来てください」という祈りをするのも切実な願いでしょう。けれども同時に、そのように大変厳しい状況の中であっても、完全に絶望してしまうのではなく、隣りの人との何気ない言葉の端に、ふるまいの一端にふとした優しさや温もりを感じることがある、

一瞬だけでもホッと一息つけることがある、小さな希望があると感じることがあるのだとしたら、そこには確かに「神様が共におられる」「救いがある」と感じることが出来るのではないかと思います。

口では「いつも共にいてくださる神様」と言いながらも、心の中では「神様は今ここにいないのではないか」と感じることも確かにあります。そして、そのような心の揺らぎは誰にでもあるものでしょうし、クリスマスに世の片隅でひっそりと生まれたイエス様自身もそうだったのだろうと思います。「いつも隣にいてくださる神様」は同時に、「いつか来てくれるはずの神様で、今はまだここにいないとしか、なかなか感じられない神様」でもあります。ですから、他人に対しても自分自身に対しても、「信仰が薄い」とか「薄情だ」とか言うのではなく、「神様共にいてください」と祈り、また「神様が共にいてくださることを表す器として、自分が用いられますように」と祈り求めて行けばよいのではないかと思います。

遭難救助を要請する際に、私たちは必ず「私たちはここにいます」と自分たちの居場所を伝えます。何ともし難い困難な状況の中で、私たちは神様に「私たちはここにいます。早く来てください。助けてください」と祈りますが、言(ことば)である神様イエス様からの答えは「私はあなたと共にいる」「私について来なさい」「闇の中の光として、決して消えてしまうことなく、共に歩みを進めていこう」です。これから年末にかけて、ますます日が短くなっていき、夜が長くなっていきます。そのような季節に「闇は光に勝たなかった」（1：5）という言葉を心に留めたいと思います。たとえともし火は小さくても、そこに存在している限り、闇に飲まれてしまうことはありません。神様から光を預かり、命を与えられている者として、私たちは今日も神様と共にあって生かされて行きます。